

合成された地図—山口県文書館所蔵「朝鮮八道総図」

高橋 公明

1. 新たな地図テキストの生成

山口県文書館には朝鮮図を基本にして日本図の一部を合成した地図が2点ある。「朝鮮八道總圖」（以下「総図」、請求番号「毛利家文庫、五八絵図、二二の一」）と「朝鮮八道全圖」（以下「全図」、請求番号「毛利家文書、五八絵図、二二の二」）である。本報告ではこれらの地図について、とりわけ地図が合成・編集され新たな地図テキストとして生成されることに焦点をあてて検討する¹。

前近代の古地図を検討すると、描かれた範囲が広ければ広いほど、いくつかの地図が合成・編集された複合テキストであることが多い。合成や編集によって新たな地図が生成されると、そのたびに地図は新たな意味を獲得する。ただし、これまで地図学史が力を注いできたのは、合成・編集された新たな地図の新しい意味を検討するというよりも、むしろ、地図の系統樹的な関心から、複合テキストを過去にさかのぼって分解し、起原となる地図を同定することであった。

ここで紹介する「総図」と「全図」は、朝鮮半島の地図をほぼ中心に配置し、その東側に日本列島の一部を組み合わせたもので、一目見て、2つの地図が合成・編集されたことが理解できる地図テキストである。もちろん、これまでの地図学史と同様に、この複合テキストを分解することは重要であり、ここでも基礎的な検討を行なう。ただし、紹介の重点は、この新たに生成された地図が表現している新たな意味を考えることにある。

地図の一般的な性格として、大きな政治的な変動があった場合を除き、描かれる範囲や構成は時代を経ても固定される傾向がある。朝鮮半島を描いた地図は多種多様であるが、南側に対馬島と済州島を東西に、北側に豆満江と鴨緑江を東西に、されに北側の中心に白頭山を配置するという構図は、ほとんどの朝鮮図に共通して見られる特徴である。したがって、そこに日本列島の一部を加えたとすれば、それは単なる合成ではなく、新たな地図が生成されたことを意味するのである。

2. 地図の概要

この「総図」「全図」は貴重な地図テキストであるにもかかわらず、管見の限りでは、河村克典による研究しかない²。河村の成果に学びつつ、ここではこの地図の特徴について、とくに海域史の立場からの私見を述べたい。

「総図」（図1）は縦275、横205センチメートルで、「全図」（図2）は縦266、横192センチメートルで、両者の大きさはほぼ同じで、ともにかなり大型である。また地形の配置あるいは記述の内容について、大雑把に言えばそれぞれよく似ており、まず、両者に共通して見られる特徴について確認する。まず朝鮮半島の描き方について見る。

- ① 朝鮮半島の北側に東から西へ、鴨緑江、白頭山、豆頭江が線上に並べられ、暗示的に境界を表現している。この境界の南側の詳細な描写と北側の簡略な描写が明確に対比できる³。
- ② 北の境界の東側は簡略というだけでなく、縮尺として解釈しても極端に縮められているため、朝鮮後期の地図にあるような北側への膨らみがなく、やや直線的である。
- ③ 各道の地名のラベルが、例えば慶尚道の地名は緑色に、全羅道の地名は赤色というようにそれぞれ同じ色で色分けされている。
- ④ 河川が明確に、幅広く、山も山名も含めて数多く描かれている。
- ⑤ 各地域の地名も細かく表示されている。
- ⑥ 朝鮮半島の輪郭は、16世紀以前の朝鮮図に起源をたどることができる地図に良く似ている。
- ⑦ 通常、慶尚道の一部として描かれる対馬島が、慶尚道とは色も異なり、日本の一部として描かれている。

以上の特徴のうち⑦以外は、遅くとも17世紀以前に起源を持つ朝鮮で作成された朝鮮図の特徴である。もちろん⑦は、これらの地図が日本で作成されたことによる修正である。つぎに日本の領域の描き方について見る。

- ① 咸鏡道から東の海上に、外枠に接して「蝦夷嶋」が茶色で描かれている。
- ② 「蝦夷嶋」から少し下に位置したところから、外枠に接して、上から下に「但馬」「因幡」「伯耆」「出雲」「石見」「長門」の山陰地域が国別に色違いで描かれている。
- ③ 山陰地域から少し下に位置したところから、外枠に接して、上から下に「豊前」「筑前」「筑後」「肥前」「肥後」「薩摩」「大隅」の九州地域が国別に色違いで描かれている。
- ④ 朝鮮半島とは異なり、河川や山についての描写はなく、主要都市の名前とそれらをつなぐ陸路・海路が赤線で表示されている。
- ⑤ 「蝦夷嶋」、山陰地域、九州の北部と西部を上から下にほぼ一直線に配置している。

以上の特徴を全体として見ると、朝鮮半島の描写の仕方とまったく異なっており、別な地図から写されたことは疑いようがない。また、⑤の特徴は江戸時代の日本図を見渡しても類例がない。この点については、おそらく朝鮮図の余地を利用して日本図を配置するために、原図の日本列島の配置を犠牲にしたのであろう。その点を除くと、合成のあとは明白で、何度も写され洗練されてきたものではなく、まさに2枚の地図を合わせて、ほとんどそのまま1枚の地図にしたと考えられる。

朝鮮半島を地図の主軸より少し左寄り、すなわち西寄りに、「蝦夷嶋」、山陰地域および九州を右端、すなわち東端に配し、朝鮮半島の東海岸と北海道・山陰地域・九州を対面さ

せている。このような構図の地図を管見の限り見たことはなく、構図・範囲ともに類例が見つかからない⁴。これだけでも、素朴な合成ではあるが、あらたな地域観を表現した新しい地図と評価できる。朝鮮半島の東側と日本列島の西側が対面していることを強調した配置である。

「総図」「全図」とも文字情報が豊富に書き込まれている。元の地図にすでに書き込まれていたと思われる地名など以外にも四角形の枠をあちらこちらに配置し、さまざまな書き込みがされている。細かく見ると「総図」と「全図」では文章、枠の表示の仕方に違いがあるが、内容としてはほぼ同じものとみなすことができる。

- ① 地図の右端の枠付近、すなわち「蝦夷嶋」と山陰地域の間配置されており、朝鮮半島部分についての凡例である。朝鮮八道の、例えば慶尚道を緑というように、それぞれを具体的に何色で表示しているか、州・郡・府などの行政区画を、例えば郡を長方形というように、それぞれをどのような形のラベルで表示しているか、さらには道や境界の表示の仕方が例示されている。
- ② ①からさらに枠に近いところに配置されており、朝鮮八道のそれぞれの行政区分の構成についての概要である。最初に朝鮮全体の幅と長さが、最後に朝鮮全体の行政区分の構成のデータが示され、そのあいだに各道の構成、例えば全羅道が「四州十二郡五府四令三十一懸六驛十二堡」というように例示されている。
- ③ ①および②の下で、出雲国と外枠の間に配置されており、朝鮮の距離の単位についての説明文で、「日本ノ十里ハ六十四里也」というように、朝鮮の里と日本の里の換算率について記述されている。
- ④ 豊前国、筑前国、筑後国と外枠の間に配置されている。この両地図が作成された経緯についての説明文。両地図の書誌的な情報としてもっとも重要な記述である。対馬島でかつて朝鮮語通訳をしていた松原正軒の情報が、この地図製作の基礎にあったこと、寛保2年（1742）、浜崎代官の清水親全が正軒の子松原正英に命じて作成したとある。
- ⑤ 地図の下部中央の外枠に接して配置されており、朝鮮半島にかつて成立していた古代王朝の檀君朝鮮、箕氏朝鮮、衛満朝鮮などから三韓諸国までについて歴史が要約されている。
- ⑥ 地図の左端の枠と忠清道の間配置されており、朝鮮半島にこれまで成立した王朝、すなわち檀君、箕子、衛満、辰韓・新羅、弁韓・高句麗、馬韓・百濟、後高麗、後百濟、高麗、朝鮮の各王朝について、例えば、「高麗 三十四代享年四百七十五年」というように記述されている。
- ⑦ 朝鮮半島のあちらこちら、さらにはその周辺の海上にも枠は配置され、細かな字でその地域に関する歴史地理的な事項、文禄・慶長の役、釜山の倭館（「日本館」）などについて記述されている。

以上、④を除いて朝鮮半島に関する地図をどう読むのか、あるいは朝鮮半島に関する歴史の概要に関する情報である。地形の配置の場合と同様に、朝鮮図を主にして日本図の一部を追加したことに対応している。④については後述する。

この1種2枚の地図は、朝鮮半島の歴史地理と日本と朝鮮半島の間を豊富な情報量で総括的に表現している。

3. 地図の分解

ここでは、地図学史での基本的な作法である地図の分解を試みる。そのためにもっとも大きな手がかりとなるのは、四角形の枠④の書誌的な記述である。「総図」と「全図」の違いはわずかなので、「総図」の記述を引用し、ついで「全図」との違いを注記する。

□（関カ）此圖者朝鮮八道總圖也。所圖之一書者、據東國輿地勝覽而、不差毫釐所寫也。嘗松原正軒對馬州為譯官、久在彼土而、日夜間交韓人、質之府州郡縣令堡、地理行程、名山名嶺河海遠島。抵西鴨綠遼東界、北豆滿女真野人境、盡考尋之以圖中書而議論之。乃云此圖最可也。嘗正軒當國來、受 國恩。茲山内廣通當執政而、清水親全為濱崎之宰皆、命正軒子正英而、於船倉之館、使開正之寫矣。以加壹岐對馬五嶋九州西北海邊而、韓人飄泊之為辨用者也。皆

寛保二壬戌秋八月也

「総図」：「全図」

□：なし。

嘗松原正軒對馬州為譯官：これに続いて時の字あり。

抵西鴨綠遼東界：抵西鴨綠遼東之境

北豆滿女真野人境：北豆滿女直兀良？（ハカ）野人界

嘗正軒當國來：嘗正軒來當國而

受 國恩：受國恩

清水親全為濱崎之宰皆：清水親全為濱崎宰子皆

於船倉之館、使開正之寫矣：於船倉之？（館カ）、使開正寫之矣

以加壹岐對馬五嶋九州西北海邊國而：以加對馬壹岐五嶋九州西北海邊之國而

皆：なし

寛保二壬戌秋八月也：寛保二壬戌仲秋下浣

「総図」と「全図」では、いくつかの記述の違いが見られるが、大きく意味が異なる箇所はない。書誌的に重要な記述は、①この地図は『東國輿地勝覽』から正確に写し取ったものであること、②松原正軒が対馬宗家の「訳官」として朝鮮に滞在中に、「韓人」から朝鮮の歴史・地理に関する多くのことを聞き取ったこと、③その松原正軒が長門国に来て、

毛利家に雇われたこと、④正軒の子正英が浜崎の「宰」である清水親全に命じられ、「船倉之館」において正確に写したものであること、⑤「對馬壹岐五嶋九州西北海邊」をそれに追加し、朝鮮人漂流民の応対用にしたこと、以上の5点である。

地図そのものについては①と②が、地図作成に関わる人的な背景については②、③および④が大きなヒントとなっている。それらのうち後者の人的な背景については木部和昭の研究によって、より具体的に確認できる⁵。

それによれば、松原正軒（新右衛門）という人物は、対馬宗家で「大通詞」を勤め、朝鮮（釜山）に数年滞在し、宝永・正徳度の朝鮮通信使の来日にあたり、江戸まで随行している。ついで享保8年（1723）に宗家を辞し、子の正英（直右衛門）とともに長門国萩に来て、朝鮮人漂流民対策として毛利家に通詞として雇われた。また、地図が作成された寛保2年（1742）の前年、阿武郡須佐浦の山嶋に朝鮮人10名が漂着し、「御船倉御雇、松原直右衛門」が通詞として事情聴取を行なっている。この事件が、④の直接のきっかけになったと考えられる。以上、「総図」「全図」の書誌的な記述と、木部によって解明された松原親子の経歴はきわめて正確に対応していることが確認できる。

地図そのものについては、『東國輿地勝覧』を下敷きにしたことが明記されているので、『新增東國輿地勝覧』に収められている地図と比較対照する。『新增東國輿地勝覧』には、朝鮮半島全体を描いている「八道總圖」1枚と、「京畿」、「忠清」など各道を描いている各道図8枚がある。「八道總圖」は輪郭としては良好な原図の候補といえるが、細部がほとんどなく、「不差毫釐所寫也」というには大雑把に過ぎる。「総図」「全図」の原図の候補としては除外すべきであろう。したがって、8枚の各道の地図を丁寧に合成したと考えるのが、もっとも可能性が高そうである。その想定にしたがって、各道の地図と「総図」「全図」の対応する部分を比較し、以下のように確認できた。

詳細については省略するが、各道図は、①海岸線の輪郭については似ており、原図の可能性が高いこと、②しかしながら、島の数が少なく、かつ配置も異なる場合が多いこと、③川筋および山の配置も似ているが、より簡略であること、④地名については牧・都護府・郡・県に限られ、それ以外の細かい地名などは記載されていないことなどが確認できた。

①の海岸線の輪郭について、いくつかタイプの朝鮮図で確認したが、『新增東國輿地勝覧』の各道の地図以上に似ている例は見出せず、「総図」「全図」がそれらを原図としていることは間違いのないところである。しかしながら、「総図」「全図」には、より細かな輪郭が描かれており、「総図」「全図」が各道図を写し、合成しただけでないことも間違いのない。②の島について、もっとも際立つ差異は、濟州島と陸地との距離である。「総図」「全図」が距離をとっているのに対し、全羅道図はほとんどのタイプの朝鮮図と同様に陸地から極めて近いところに濟州島を描いている。③④について、松原正軒が対馬宗家の「訳官」として朝鮮に滞在中に、「韓人」から朝鮮の歴史・地理に関する多くのことを聞き取ったことが、きわめて大きな役割を果たしていると考えられるべきであろう。なお④について細かく言えば、「総図」「全図」が17世紀以降の地名の変更を反映しているのに対し、当然、『新增東國

輿地勝覧』の各道図は15世紀の地名が反映している。なお、山口県文書館が所蔵している「朝鮮国之図」（請求番号「毛利家文庫、五八絵図二三」）は、「総図」「全図」の朝鮮半島部分と類似しているが、地形などは簡略で、地理情報も異なっており、両者が共通の祖図を持つ可能性はあるが、「朝鮮国之図」から「総図」「全図」へ地図に関する情報を写し取った可能性はほとんどない。

次に「對馬壹岐五嶋九州西北海邊」を「総図」「全図」に書き加えたことについて確認する。「総図」「全図」のなかに典拠についての記述はないため、いくつかのタイプの日本図を比較してみたが、類似性の高い地図を同定することはできなかった。「蝦夷嶋」から「薩摩」までを一直線に配置した地図はなく、おそらく朝鮮図の余白を考慮して、日本列島を棒状に変形したと推定できる。それを前提として刊行されている古地図帳などでいくつかのタイプの日本図を見ると、もっとも似ているのは、江戸時代に数度実施された国絵図の作成時に合成された日本図である。そのなかで候補になるのは、正保年間（1648年ごろ）成立の徳川幕府撰日本図（「正保図」）と元禄15年（1702年）成立の徳川幕府撰日本図（「元禄図」）である⁶。

「総図」「全図」のなかの簡略な表現と比べると、どちらもかなり精緻な地図だが、海岸線を大雑把に描いたとすれば理解が可能である。どちらも国ごとに色分けしており、その点については写したことが反映しているのかもしれない。それらのなかで両図を候補とするもっとも大きな理由はつぎの点である。まず、どちらも隠岐諸島のうち島前三島の知夫里島・中ノ島・西ノ島と島後島を山陰地域の海岸線に平行に配置している。じつはこれ以前の国絵図、例えば寛永国絵図では、島前と島後を南北に配置しており、正保国絵図になって東西に配置するようになる⁷。おそらく、これが「正保図」・「元禄図」に反映したのであろう。

つぎに、以下の二点が「元禄図」をもっとも可能性の高い候補とする根拠である。①どちらも北海道が描かれているが、「正保図」には「蝦夷嶋」というような文字表記がなく、「元禄図」には明確に「蝦夷嶋」と表記され、「総図」「全図」と対応していること、②対馬島の描き方も似ているが、「元禄図」にのみ対馬島の南の中心に「有明山」と緑色で描かれており、「総図」「全図」のそれと対応していることである。

以上、「総図」「全図」が下敷きにした朝鮮図と日本図について現時点での候補について検討した。

4. 海域史から見たこの地図の意義

「総図」「全図」を海域史の観点から見たとき、もっとも大きな意義はその構図にある。すでに述べているように、朝鮮半島と日本列島のうち北海道の西側、本州の西側あるいは北側、九州の西側を対面させる構図で、日本海を挟んで朝鮮半島と日本列島が向かい合っていることを強調している。実務的にも朝鮮半島からの漂流民との対話においても大きな威力を発揮した可能性がある。それ以外にもいくつか注目すべき点はある。

先にも指摘したように、済州島は朝鮮半島から離れた位置に置かれている。江戸時代に日本に伝わった朝鮮図の多くと同様に、『新增東國輿地勝覧』の全羅道図も両者をきわめて近くに描いている。この違いは意図的なものと考えられ、全羅道図に描かれているほどには両者は近くないという認識が反映したものである。松原正軒が釜山での「韓人」との交流によって得られた知識が子の正英に伝わったのであろう。もちろん、相対的には朝鮮半島と済州島は多くの朝鮮図などで描かれるほど近くはなく、「総図」「全図」の描き方はより正確である。

ところで、済州島を朝鮮半島から離れたところに描いた地図が、当時の対馬島にあった。その地図は現在「朝鮮八道地図」と呼ばれており、1923年に対馬宗家から朝鮮史編修委員会の前進となる機関に貸し出され、その後、正式の手続きもなく、朝鮮史編修委員会の所蔵となり、現在、韓国の国史編纂員会が引き継いでいる。この地図は16世紀前半に朝鮮で作成されたと推定できるが、朝鮮半島より北の地域に関する15世紀およびそれ以前の情報が豊富で、かつ、朝鮮半島周辺に数多くの島々を描いており、後者についてはとくに海域史においても注目すべき地図である⁸。

したがって、「総図」「全図」がこの地図を参考にした可能性について考えなければならない。ただし、この地図を参考にしたとすると、済州島と朝鮮半島の距離だけでなく、地形の輪郭、多くの島々などそのまま写したくなる素材にあふれており、済州島と朝鮮半島の配置だけが影響を受けるとは考えられない。したがって、松原正軒であれ、正英であれ、この地図を対馬島で見た可能性はほとんどないのではないだろうか。

これまで、「総図」と「全図」をほとんど区別せずに検討してきたが、隠岐諸島と鬱陵島間の海域の描き方に明確な違いが認められる。まず、共通点から確認する。日本側の地域では、海路を現わす赤い線が多くひかれているが、「総図」「全図」ともに「宇龍」から島前、「ミオ」（美保関）から島後に2本の線がひかれている。朝鮮側の地域では赤い線はほとんど陸路を現わしており、海路では対馬島と「釜山浦」を結ぶ線と、この「蔚珍浦」から「于山島」を経由して鬱陵島の西側までひかれている線しかない。この例外的な表現から推定すると、朝鮮半島から延びる2本の赤い線は、この地図作成時に追加されたのではないだろうか。地図作製者の海路に関する関心の高さを表わすものであろう。

「全図」になると、さらに海路への深い関心が表現される。隠岐の島後と鬱陵島の東側も赤い線で結んでしまうのである。隠岐諸島から鬱陵島への漁民が頻繁に出漁などこの海域における人々の活動が地図のなかで視覚化されたということである。この点だけからいっても、「全図」は「総図」よりも後に制作されたと推定できる。全体に描写も「総図」よりも雑で、古地図としての価値は「総図」よりも劣るかもしれないが、ここで見たように海域史の観点からは見落とすことのできない表現もあり、「全図」についてもさらに検討が必要である。

以上、山口県文書館所蔵の「総図」「全図」について、海域史の観点から基礎的な考察をおこなった。

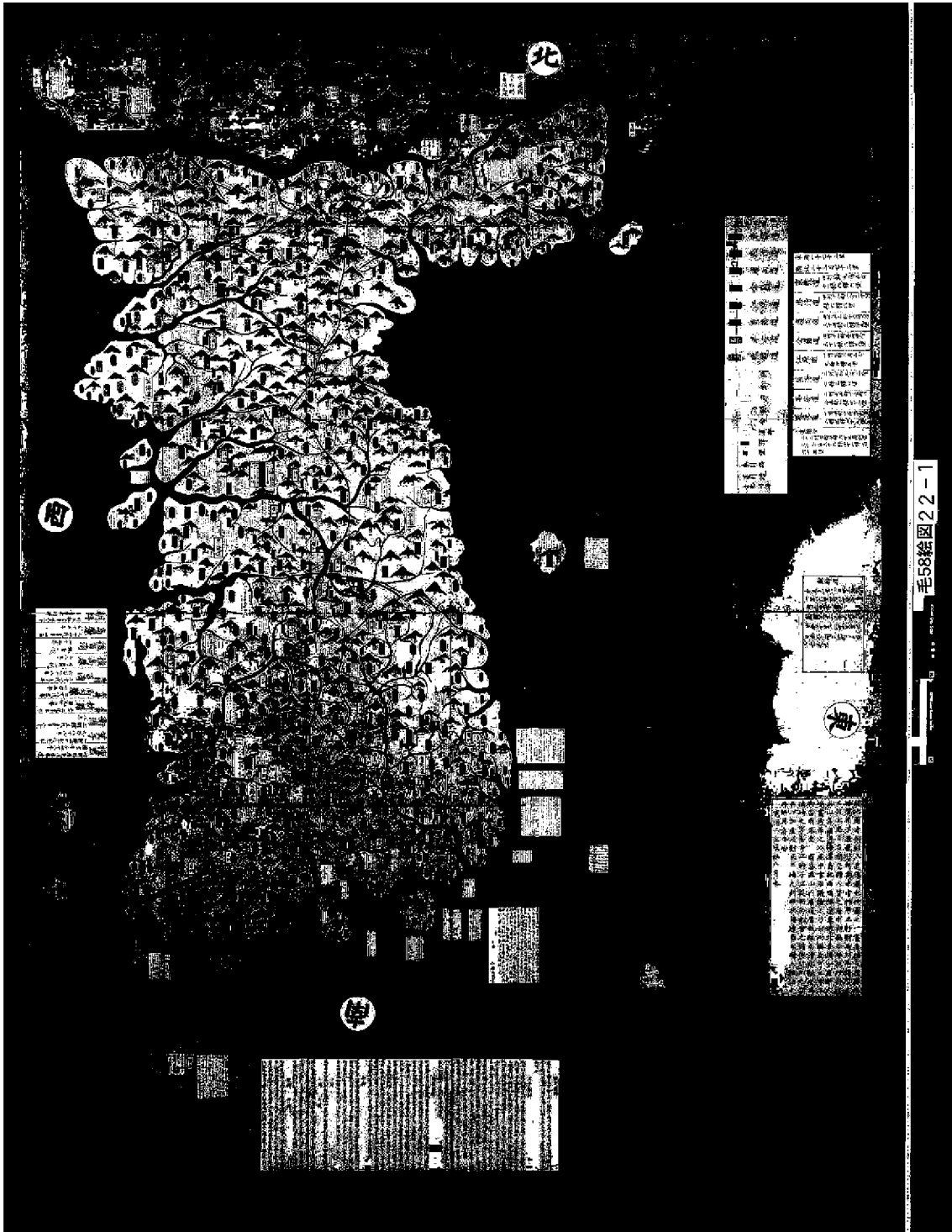


图 1 朝鮮八道總圖（山口県文書館所藏）

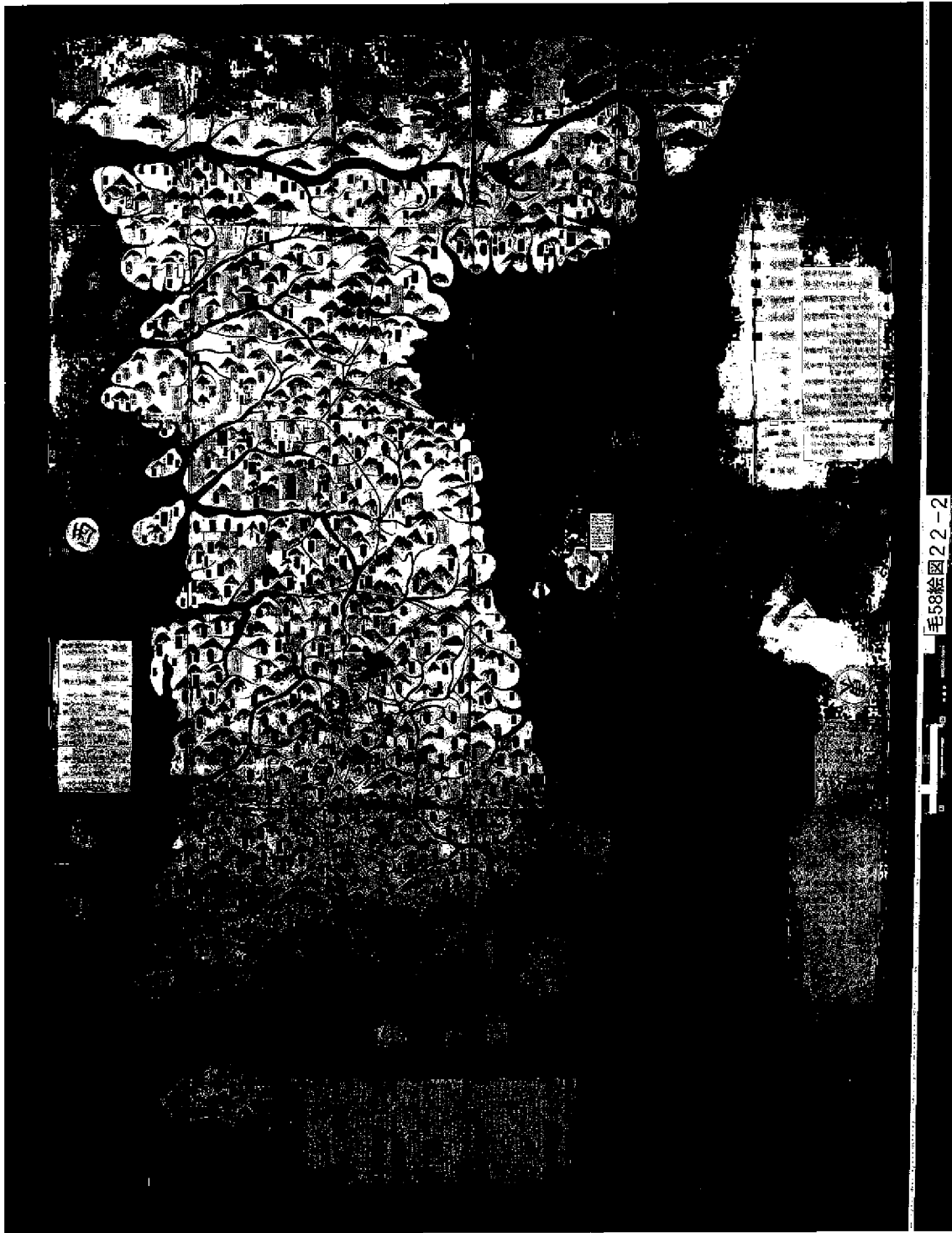


図 2 朝鮮八道全圖（山口県文書館所蔵）

注

1 2006年7月7日、山口県文書館を訪問し、専門研究員の河村克典氏、和田秀作氏をはじめとする山口県文書館の皆様には、古地図閲覧に関して、さまざまな便宜をはかっていただいた。また、翌日の大内氏関係遺跡の巡見に関して、山口市文化振興課市史編纂室の斉藤智恵氏には、折からの雨にもかかわらず、丁寧に市内各地の案内をしていただいた。ここに謝意を表わすものである。

2 河村克典「朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図」『山口県文書館研究紀要』第24号、山口、1997年、1-17頁。

3 1712年に朝鮮は清と白頭山を国境とし、定界碑を建てた。これ以降、朝鮮側に北方の境界についての、より正確で深い認識が成立した。文純実「白頭山定界碑と十八世紀朝鮮の疆域観」朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』40号、東京、緑蔭書房、2002年。したがって、暗示的な国境の表示の仕方は、定界碑が建てられる以前の認識の反映と見られる。

4 日本図を中心にして、朝鮮半島の一部を含んだ地図であれば数多くの事例はある。

5 木部和昭「朝鮮漂流民の救助・送還にみる日朝両国の接触——朝鮮通詞の問題と漂流民の騒擾事件を中心として——」『史境』26号、つくば、1993年、36-54頁。

6 秋岡武次郎編著『日本古地図集成』の「図録」18（正保図）と33（元禄図）、鹿島研究所出版会、東京、1971年。

7 国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、東京、2005年、212-213頁。

8 「海域史からみた朝鮮図」研究代表者村井章介『8-17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流——海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に——』上（平成12年度～平成15年度科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）研究成果報告書）2004年3月、281-294頁。